

### III ホタテガイの早期放苗試験

赤星 静雄\* ・ 佐々木鉄郎\*\*

従来、ホタテガイ稚貝が健苗として放流用に使用出来るのは殻長3cm以上のものと考えられて来た。この為に中間育成も大部分の稚貝が3cm以上となる12月またはそれ以降まで続けられるのがならわしとなっている。

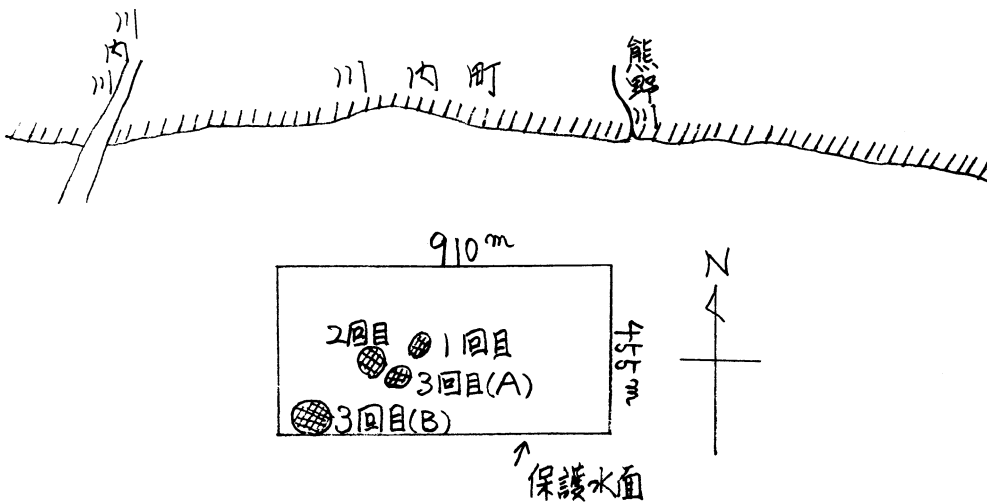
しかし、それよりも早く、それ以下の大きさの稚貝が放流用として使用出来るものであれば、中間育成資材、管理費が節減出来て非常に有利となる。

こうした考えから、昨年度より早期放苗試験を実施して来たが、本年度は昨年早期放苗したもののその後の状況を追跡すると共に、新たに3回に別けて早期放苗し、その後の生育状況を観察した。

#### 試験方法

##### ○場所

下北郡川内町川内地先に設けられているホタテガイ保護水面内で、昨年度実施した場所に隣接した個所。



第1図 昭和43年度ホタテガイ稚貝放流地点

\* 赤星 静雄 : 現在 SANTOS, EST. SP. BRASIL  
\*\* 佐々木 鉄郎 : 現在青森県主任水産業改良普及員 川内町駐在

○時期および方法

(1) 昭和43年9月16日

今年度稚貝第1回放苗。17,000個

昨年度放流稚貝の潜水観察、測定。

(2) 昭和43年10月19日

今年度稚貝第2回放苗。10,000個

今年度第1回放流稚貝の潜水観察、測定。

(3) 昭和43年11月16日

今年度稚貝第3回放苗。A地点3,000個、B地点47,000個

試験結果

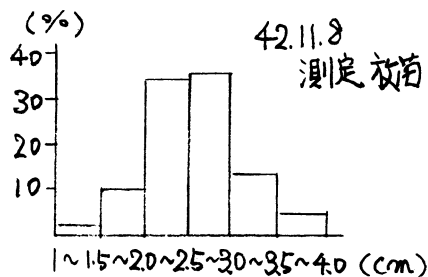
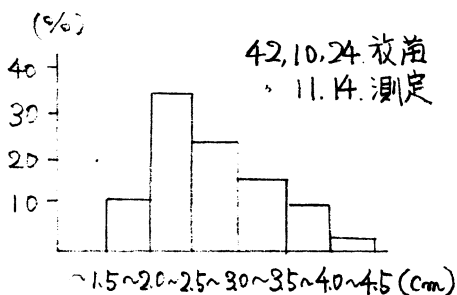
(1) 昨年度放流稚貝の調査結果

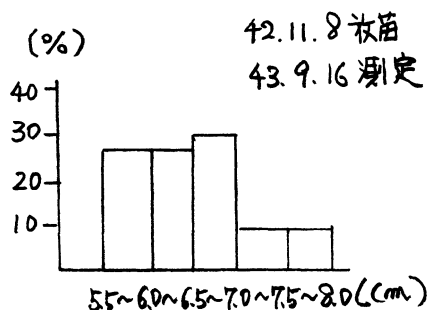
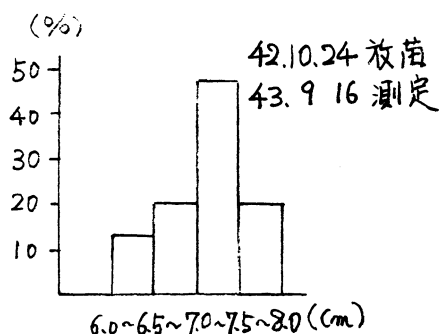
昨年度は10月24日に10,000個、11月8日に6,500個を放苗していたが、これ等のものを今年9月16日に潜水観察した結果は、その後の拡散が大きくアマモが点在している周辺に多く、大小の礫地帯には少ない傾向があった。生息密度は場所により必ずしも均一でない事は前述のとおりであるが、平均すると4~5枚/m<sup>2</sup>程度となり、死貝は1個もみられなかった。

また採取されたものの測定結果は第1表および第2図のとおりで、42年10月放流のものでは平均殻長7.14cm、42年11月放流のものでは6.55cmで、10月放流のものの方が11月放流のものより0.5cm大きかった。また平均重量でも前者が平均46.0g、後者が35.7gと10.3gの差があった。

第1表 昭和42年度に放流したホタテガイの平均殻長および重量

放流又は調査年月日	平均殻長(cm)	平均重量(g)	備考
42. 10. 24 放苗	2.19	2.3	42年度第1回目
42. 11. 14 測定	2.78	2.97	同上 測定
" 8 放苗	2.63	2.65	" 第2回目
43. 9. 16 調査	7.14	46.0	(42.10.24) " 第1回目のもの
" "	6.55	35.7	(42.11.14) " 第2回目のもの





第2図 昭和42年度に放流したホタテガイの殻長組成

(2) 今年度の稚貝放流状況および調査結果

第1回目(9月16日)に放流した場所は保護水面内のほぼ中央部で、水深8m、底質は昨年度の場所と同様砂質で礫が多く、アマモが点在していた。放流に当っては船を円形に走らせながらまいたので、放流直後には稚貝の分散状況はほぼ均一で50~100個/m<sup>2</sup>となった。

第2回目(10月19日)は、第1回目の南西側約100mの場所で、水深は8.2m、底質は第1回目と同様であった。

第3回目(11月16日)は、第2回目のところから南東約50m、および南西約200mの場所で、水深は沖側で8.7mであった。

放流した稚貝の大きさは、第1回目のものは平均2.00cm・1.14g、第2回目のものは平均2.64cm・2.68g、第3回目のものはA地点のものが平均3.5cm、B地点のものは2.8cmであった。

なお、11月16日に今年度放流稚貝の放流後の観察をする予定であったが、時化の為潜水できなかったため、明年度追跡調査する予定である。

考 察

昨年度放流したものの追跡調査結果によれば、その生残率は正確に把握することが出来なかったが、死貝が全く発見されず、また不均一ではあるが、所によっては可成りの密度で育成しているのが認められた。またその成長も昨年10月放流のものの方が11月放流のものより幾分よかった。

このことから、ホタテガイ稚貝は10月末、殻長が2cm前後になったものであれば、放流して生残る事が認められ、可成り早期に中間育成を打切っても放流可能である事が解って来た。

今年度はその放流時期を更に早めて9月中旬に行なっており、その結果が出る来年度の追跡調査結果が楽しみである。

なお、この実験は、底質の比較的良好な場所で行ったものであり、底質のより悪い場所でどうなるかに就ては、将来別途に検討する必要があるであろう。